

内田魯庵全集

別卷

雜

纂

内田魯庵全集

別 卷

雜 纂

ゆまに書房

内田魯庵全集 別卷

昭和六十二年十二月十日 初版

著 者 内 田 魯 庵

編 者 野 村 喬

発行者 荒 井 秀 夫

印刷所 第二整版印刷所

製本所 文勇堂製本工業(株)

発行所 ゆまに書房

東京都千代田区内神田一―五―十一セントラル大手町

電話 二九二〇七九八

振替 東京四一六三一六〇

内田魯庵全集別卷／雜纂 目次

酒 鬼	一一
當世文學通	四九
紅葉山人の『拈華微笑』	六三
讀小説法	七〇
當世作者懺悔	七八
歳末最後の所感	九七
藏書の趣味	一〇〇
二十世紀質屋の庫	一〇五
百科全書の過去及現在	一二二
感じを現はす言葉	一一九
社會批評家としてのバアナアド、シヨオを論ず	一三〇
英國に於けるイブセン劇の編年書史	一四七
森鷗外論	一五八

明治の翻譯	一六二
ブランドスの讀書論	一七〇
新希臘主義	一八七
移轉男	二三三
又玄夜談	二二九
語録趣味	二三〇
落伍者也、失敗者也	二三三
強兵の幻滅	二三五
財産沒收叩き放し	二四〇
惡辣政治家の傀儡たる勿れ	二四一
余が愛讀の紀行	二四二
禁酒・節酒・少酌論の根據及び其批判	二四三
家賃は漸減すべし	二四五
小部落を作るのみ	二四六
私の趣味 私の家庭に於ける遊戲とその方法	二四七

罰金税	二四八
兒孫の爲に蓄財するの可否	二五〇
歌舞伎座で見たい狂言	二五一
インカの古陶器を前にコレクションの定義を	
説く魯庵氏	二五二
インカ蒐集に就て	二五四
悲しむべき世の傾向	二五八
一番不足してゐる科學的興味	二六一
侃のウナリ	二六三
女は進歩した	二八三
諸名士の雜誌新年號觀	二八四
『文藝東西南北』序	二八五
閱覽聽聞月録	二八七
茶代は輕きに失せず	二八八
私の此頃の生活	二八九

新著を閑却するは本當の讀書家に非ず	二九〇
寫眞の話	二九三
興味深く讀んだもの	二九五
貧困時代は終始一轍	二九六
明治文藝展に就て	二九七
文化移植時代	二九八
此頃の日記	三〇二
婦人に薦めたい書物	三〇五
窓から眺める	三〇六
手持無沙汰	三六四
我子の場合	三六六
書籍の話	三六七
進歩したと思ふこと退歩したと思ふこと	三九〇
日記(一)	三九三

日記(二)	三九九
日記(三)	四二六
日記(四)	四六二
日記(五)	四八九
日記(六)	五二九
日記(七)	五三六
内田魯庵年譜(野村喬編)	六〇三
内田魯庵著述年譜(野村喬編)	六一七
解題	六四九
解説	六五九

雜

纂

酒

鬼

酒

鬼

(其 一)

寒さ！ 下駄の音遙かに響き人聲の夜半を送る寒さ！ 月は牙て隈なく輝てるせば輝すほど寒き光。闇ならば驚くまじきに……凄き犬の遠吠。哀を添ゆる按摩の笛。是と共に寂しさを破る雁の一ト聲。霜枯時の悲しさは又格別にて、牡を呼ぶ鹿なければ空しき闇を嘆つものあらねど錦の帳に垂籠ては知られぬ悲しさ。無残にも北風は梢を拂ふて連字窓に攻つける、其刃には海うみ獺の帽子絹布の夜具も敵しかぬるを。まして一枚の袷——袷ならばまだしも、肩ばかり三重に裏は破れ海松の如き衣を纏ひ。破障子を通す空氣に明滅する手らんぶを燈しに心細氣に欄縷二ツ三ツ取合せて繼物をする六十餘りの老婆。しばし手らんぶを見詰てホツト歎息、何故ぞ……凹き眼より洩あ水二三滴皺に溜るを震へる手にて拂ひ。思出した様にツト立て琉球疊のはつれに轉まけかゝるを其まゝ二步ふ三步、古新聞にて張たる襖を開けば儀式ばかりの持佛堂。眞鍮の香爐花立は三年も前に屑屋の籠に入りしに本尊の彌陀佛今にくすぶり給ふに黄金の肌を現はし給はぬと覺

酒

鬼

ふ、「鎗一筋の御土様の御邸には珍しき出来合の木佛」と掘出し物に妙を得た道具屋の物語。無残や清淨の佛壇も鼠の爲に荒されて、惡臭の中に倒れたる眞黒な位牌を老婆は叮嚀に起して正面に直し。塵埃の中から掻集めたる安息香の折を缺損じたる油皿に焚き。暫くは口のうちに念佛、頓て薄暗き佛壇を見詰め眼をしばだゝきしが涙のせきはきれ、たまり兼ねてドツカと坐し風に搖々油煙に顔背け水鼻と共に袖で拭き、怨めしきふに佛壇を見上る其憐れさ。眼は凹み皺は寄り骨顯はれて疲こけたれど何處かに残る品格は昔床しく思はる、思はるゝだけに憐れさも又ひとしほ。門札に靜岡縣土族の肩書あるを見れば昔は多分何千石かのお邸の奥様、かりそめの用にもコレよと腰元を使ひし身分。時世とは云ひながら……噫氣の毒。サツト来る風と共に勢よく戸をガラリ、「お須摩……」

苦々しげに老婆は入口をながめて「お須摩は居ないヨ……又お前酔て來たネ」

「ナニ居ねエ、ゲーツブ……亭主の留守に何處エ行きやがつた、馬鹿め」

口小言と共に障子を開くれば酒氣フンブン。熟柿の様な香をさせるは三十の上——早や四十にも近き筋骨逞しき男。縫目綻びたる小倉の古洋服を素肌の上に着て、白ならば汚れたる——鼠ならば褻めたる木綿の三尺を卷き。髪は蓬の生へたる如く髻ムシヤクシヤ、朱漆の様に顔赤くして眼も血走り。舌舐ずりしながら左の手に持ちたる豆絞りの手拭包を投出し。右の手にさげたる貧乏徳利を口にあてがひ其まゝグツト一と呑、胸を突出してゲエー。老婆はあきれた顔。

「お前、月給は持て來たかい」

「月給……持て來ました、今日は大盡サ」急に眼を据へて「お母さん、お須摩は何處へ……」

「お須摩かエ、お須摩はアノ……お邸へ」

「お邸へ、人……わらかせやがらア。お邸へつて無暗に……なんだ亭主の留守に、人を……」

「なんだネお前、かふして居られるもお邸のお影じやないか。お前月給はホントに持て來たノ……持て來たならお渡し」

「お渡しタツテもう有りやしない。ソナ……お母さん、野暮だよ剛ひ顔をして。平生碌に食べさせないから……サアお母さんお食べなさい」

豆絞の手拭を解けば竹皮包、横町の夜臺店を覆へした稻荷鮓。「サアお母さん」と進めながら一ツ頬張り、手近な湯呑を取りて茶碗酒。

「お母さん、今日はネあの久保村が恐ろしく酔張つちまつて伊勢久の番的を、オイお母さん……お聞よアノ久保村が……からモウ頭部六になつて『オイ番衆……』アハ、ハ、ハ、こんな調子サ。オイお母さん、いやに澄し汁ときましたナ。ナニなぜ酒を飲んだ、酒を飲んで悪けりやア酒が……イ、ヤ僕が誤る閉口……頼首……謹言。お母さん、是ほどにお詫をしても許されぬ……トハ道欲。ネエお母さん一杯飲んで……チツト浮々しやしやんせ」

酒
鬼
母は見向もせず、眼に一杯の涙。酔て誤るならばなぜ飲みしぞ、浮々しろと曰はずとも酒飲まずして歸らば此母は嬉しきに。我子とは云ひながら四十にも近き分別盛、世間並ならば子に異見する年でありながら

……。涙に聲を掻曇らせ

「作次、お前今も……」

「御異見、恐縮（兩手を廣げて）……マア……マア、お母さん聞給へ。僕はモウ禁酒、否エ昨日は一滴も飲みません……ダもんだから今日もズツト歸らふ……ト思ふと久保村が『ナアンダ山澤意氣地がない……』と云ふ様な寸法で、ゲー……もう恐れ入た。明日から禁酒……禁酒」

怨めしさふに母は我子の顔をながめ涙を拂ひながら

「禁酒はいゝが、お前……今日は……」

「イヤ禁酒します、御異見お預け。こわい……由良之助でござるぞ」

コロリ臂を枕、由良……之助と云つたまゝ眠る。母は涙片手に摺寄り「作次……作次……」と揺れば、はや寝惚聲で「禁酒……由良」。何事ぞ……コレ作次、酒に生根が奪はれしか。昨夜もあれほどまでに言聞かせしに——言聞かする年でもなけれど。外の日とは違ふ亡父の命日、幸ひ月中旬にて砲兵工廠より賜はる給料、僅かなりとも心ばかりの供物せんと思ひ。心待にせし我子の歸り、よもや今日こそはト頼は仇となりて七時……八時。位牌を直す氣も失せて——今朝食べしは唯一碗の粥。我子の持歸る半月の給料を力にし、久々にてきたたての御飯に味噌汁をと心頼は丸山の鐘と共に數盡し。最早勘忍のながりたき我子、總領の男とて乳母をも置かず、あくびをしてもハテと首かゝげ、ワツト啼く聲に胸轟かし、寝れば寐るで又物案じ、驚風疱疹さては麻疹、一時だに落付し間なきに、十六と云ふ曉友達に誘はれて向島の櫻が病